

或羽大學麻田分校紀要

一四二六年春

〈小説〉葡萄　　イリヤさんのシュールな一日　　一

ガルデアの統合性に就いてのキリスト教の三位一體との類比に基づいた
解釋　　4

火星帝國の年表　　14

葡萄 〜イリヤさんのシュールな一日〜

二十年前前、内海の東のとある小島の女王が、跡継ぎを決めぬ儘亡くなった時、女王には二人の娘と一人の息子があつた。およそ内海の國では、地位と云ふ物は母から長女に譲られるのが習はしだったので、同じ内海の國であるカトリルイシス國 Katoriruisis は、三人の子の内の長女を支持し、次女の起した亂を鎮める爲、兵士の一團を此の島に送つた。此を良しとしなかつたのが、東方世界の東の果て、外洋の島々を統べる大國、タールアカナ國 Taruakana だつた。外洋の國々では、内海と異なり、地位は父から長男に譲られるのだ。

カトリルイシス國とタールアカナ國との争ひは、直ぐに決着が付く物と思はれたが、いつしかこの戦は島を離れて拡大し、東方世界の三分の二を巻き込む大戦争に發展してゐた。イリア Hamyurufaria Iria は、この戦争の半ば頃に、北邊民族の讀星師の娘として生を享けた。七歳の頃、タールアカナ國の軍が北邊民族の都市群を攻撃した時、イリアは両親と故郷を失つたが、後からやつて來たカトリルイシス國の從軍神官團に拾われ、神官見習ひとして働く事になつた。

以來、五年の月日が流れた――

細い窓の隙間から、日の光が差し込んでゐた。
昼前の朗らかな陽光が、目蓋を透過しても感じられる。
下四位讀星官・イリアは、一旦は布團の中に潜り込んで光をやり過ぎさうとしたもの、思ひ直して寢床から這ひ出した。部屋の壁には複雑な目盛が刻まれてゐて、細い窓から入つた光が當たる場所によつて、時刻が解る様になつてゐる。
今は二十刻頃かしら――イリアは横目で目盛を讀みながら寢間着を脱いだ。
寢台が日光に曝される位置にある所爲で、イリアは本來定められた起床時刻よりも早めに起きるのが常であつた。今日も五刻ほど早く起きた様だ。
「お早う。イリア。」隣の寢台の布團の中から声がした。

「お早う御座います。先輩。」
上四位讀星官・スワティアの事を、イリアは「先輩」とだけ呼ぶ。
「すわ」「とわ」「すめ」等の、カトリルイシス國獨特の音節を、まだ正確に發音出來ないからだ。スワティアの方では、その事を特に気にしてはゐなかつた。讀星官仲間で彼女の名を正しく發音出來ない人は、イリアの他にも幾人もゐたのだ。

イリアは、壁に掛けてあつた白い神官服を手に取り、少し塵を払つてから身に纏つた。
「今日も手傳ひ？」スワティアが布團に潜つたまゝ、尋ねた。
「えゝ。」イリアは、華ペンや算盤等、必要な物を一通り巾着に仕舞ふと、それを腰紐に括り付けた。「先輩に迫付きたいんです。」

「熱心で宜しい。」
「どうも……ぢや、また昼食の時に。」
「行つてらつしやい。」
スワティアは、布團の中で呟いた。「もう追抜いてるわよ。」

イリアがカトリルイシス國に來た當時、この國は東方世界で最も天文学が進んだ國だつた。

カトリルイシスの國都は、ジャカーノルアハト Jakano ru Ahato・鼎月の都と呼ばれ、カトリルイシスに服属する諸邦は元より、東方世界のあらゆる國々の人々が集つてゐた。讀星官・讀星師を志す者、遙かなる遠國から訪れる商人、精巧な天測儀や鋭利な薙刀を拵へる職人達、果ては、預言だの啓示だのと言つては虚辞空言を並べる異教の僧共。中でも重要なものが、曆表や星表を求めてやつてくる人々だ。ジャカーノルアハトの讀星官團が編纂し、白月の大神官の印を捺された曆表は、東方世界で最も正確で權威ある曆として知れ渡つてゐた。この曆表を書写し、販売する事も、讀星官の重要な仕事の一つだつた。
イリアはまづ水汲み場で、手、口、顔、髪を清めた。この水汲み場の水は、ジャカーノルアハトを遠く離れた山々から、高度な建築技術を駆使した水道橋を通つて運ばれた物だ。カトリルイシス國の多くの都市には、上下水道が整備されていた。これ程インフラ整備に氣を遣ふ國は、東方世界に類を見ない。

書写院は、水汲み場の直ぐ近くだ。イリアが中に入ると、既に多くの神官達が、各々の机で作業に就いてゐた。殆どの神官は、イリアと違ひ、黒い神官服を着てゐる。黒服は、黒月の大神官の指揮下にある事を表す。法学や文法学、國政に關する事務に携る神官が、これにあたる。黒服なら、インクが多少跳ねても氣にならないと云ふ、實用的理由も一應ある。

「おゝ、今日も御苦労様。」書写院の長は、イリアを見掛けると、傍らの箱の中からこはゝゝした紙を何枚か取出した。

「はい。今日の君の擔當分だ。今年の冬版の大神官曆表、月の章の十三頁から。」差出された紙束と原稿を、イリアは丁寧を受取つた。

「有難う御座います。」イリアは空いた机を見付けると、紙と原稿と筆記具を廣げた。直

ぐに奥の方から校閲役の神官が現れた。書写の際は、幾人かに一人の割合で校閲役が付き一枚書き上がる度に誤記が無いか確認するのが決まりだ。

「宜しく御願ひします。」と、イリア。

「どうも。」校閲役は會釋を返した。

イリアは早速書写に取掛かった。曆表と云ふ物は、素人が見ると只の數字の羅列にしか見えない。だが、ある程度天文学の知識がある人間であれば、この數字の中に、明瞭な天上の法則を見出すことが出来るであらう。イリアが写してゐるのは、この惑星を廻る三つの月の時間ごとの位置をひたすら列舉した數表だ。イリアの頭の中では、三つの月が規則的に天球上を滑つて行く様子がはつきりと描き出されてゐた。

律法や歴史に就いて書かれた長い文章に比べて、天文數値の書写では、誤記や校閲漏れが起こり易い。隣でイリアの書いた写本を校閲してゐる青年も、普段より校閲に時間を掛けてゐる様だつた。イリアの方は、本業が讀星官であるから、數値に關しては他の部署の神官達より扱ひ慣れてゐる。さうは謂へども、イリアの書写の正確さは、同じ歳の書記官見習ひ達を遙かに超えてゐた。

私はもしかすると、讀星官よりも書記官に向いてゐるのかもしれないわね——イリアは一瞬さう思つた。しかし、この仕事は飽くまで手傳ひ、副業なのだ。イリアはまだ十二歳だから、專攻を變へようと思へば變へられない事も無いのだが、イリア自身、今の仕事には充分満足してゐた。特に轉職する理由もなかつた。

イリアは最後の一枚を写し終へ校閲役に手渡した。彼は、出來上がった写本をしげゝと眺めた。

「これだけ書いて書き損じ無しなんて。かう云ふのを才能って云ふのかしら。」校閲役は獨りごちる様に言つた。

「速い、巧い、間違はない、三拍子揃つた讀星官見習ひがあるつて、書記官寮で噂になつてゐるわよ。どう？　今からでも書記官を目指してみない？」

イリアは困つてしまつた。他の部門への轉向は、たまにふと思つた事はあつても、眞剣に考へた事等無かつたし、面と向かつて勧められるのも初めての事だつた。

「えつと、その……」

その時、二十七分刻を知らせる鐘が鳴るのが聞こえた。

「す、済みません！　私、その、時間なので。」

イリアは慌ててペンを巾着に突つ込むと、校閲役に一礼して、小走りに書写院を後にした。

觀測を擔當する讀星官團は、夜の前半を受け持つ集團と、後半を受け持つ集團に分かれてゐた。両方が同時に起きてゐる、正午直前と日付變更の直前には、それぞの觀測内容の報告の儀が行はれる。特に正午直前のそれは、全神官の長にして、カトリルイス國の統治者でもある三人の大神官が参加する事になつてゐた。

イリアが、鼎月の神殿に入つた時、既に殆どの讀星官は定位置に着いた所だつた。正面には、三體の巨大な女神像があり、こちらを見下ろしてゐて、それぞの像の前には、大神官のための座が設けられてゐる。しばらくして、白い神官服を纏つた白月の大神官と、黒い神官服を纏つた黒月の大神官が、その座に着いた。赤月の大神官は、軍事を擔當すると云ふ役職上、参加しない事の方が多かつた。

讀星官の代表が、前に進み出て報告を讀み上げ始めた。報告の儀は、飽くまで報告に過ぎない。おそらく都で行はれるどの儀式よりもずっと簡素な物であらう。惑星の位置、月の満ち欠け等は、天文計算によつて何年も前から解る事なので、報告内容の殆どは、天體の實際の位置と計算上の位置がずれてゐなかつた事、である。

「報告。今年初めて、恆星シユステルが觀測されました。」

恆星シユステルが夜明け直前に昇る頃は、葡萄Eupetの句であると言はれてゐる事を、イリアは思ひ出した。一旦想像すると、どうにも食べたくなつてくる。結局儀式が終るまでの間、イリアは葡萄の事ばかり考へてゐた。

儀式が終ると、讀星官は讀星官寮に戻つて「昼食」を摂る。もつとも、半數にとつては朝食であり、残りにとつては夕食なのだが。

カトリルイスの主食は、米に似てゐるものゝ、米より粒がかなり大きい。これを炊いて、御握りを作る。

寮の食堂では、スワティアがイリアを待つてゐた。

今日の昼食は御握りと根菜の煮物だつた。根菜の煮物は美味しかつたが、イリアの頭の中はすっかり葡萄になつてゐた。

「先輩、ふと思つたんですけど、今日市場に葡萄を買ひに行きませんか？」

スワティアは危ふく食べてゐた御握りを取り落しさうになつた。

「私の考へてる事を讀んだの？」

「まさか。たゞ、シユステルの事を聞いたなら、何となく思ひ出してしまつたんです。」

「私も同じ事考へてたわ。」

昼食を食べ終へた後、イリアとスワティアは連れ立つて西の市場に出掛けた。ジャカーノルアハトは、それほど大きな都市ではない。元々、天體を觀測する事を第一に考へて造

られた都市なので、交通の便はあまり良くないのだ。

市場に着くと、葡萄は簡単に見付かった。

葡萄の他に無花果や石榴もあつたが、今日は葡萄ばかりが売れてゐる様に見えた。イ

リアは巾着の中から銅貨の袋を取り出した。

「をちさん、葡萄二房くださいな。」

「おや、。お二人さん、さては讀星官だね。」果物売りの老人が言つた。「ついさつきも、讀星官が葡萄を買つて行つたよ。君らで何人目になるかの。」

「そんなに來たんですか？」イリアは老人に尋ねた。

「あゝ。大體予想はついとるよ。シュステルが昇つたんぢやろ。もう毎年恆例の事ぢやからの。」

老人は葡萄を二房取つて、イリアに手渡した。

さういへば、去年も同じ事で驚いた気がするわね——イリアはそのことに気付くと、何だか妙に恥づかしい気分になつた。

讀星官寮に戻ると案の定、みんな葡萄を食べてゐた。

「私は葡萄の香りをかぐ度に、今日の事を思ひ出すのかしらね。」みんなの食卓の上にならずらりと並んだ葡萄を眺めながら、イリアは獨りごちた。

「何の事を？」横で葡萄を食べてゐたスワティアが尋ねた。

「うーん……何でもない。」

イリアも、買つてきた葡萄を一粒つまんで、食べた。葡萄はよく熟れて甘く、良い香りがした。

少しづつ食べたい所だが、さうも行かない。今日もまた、天體觀測の時間が近づいてゐるのだ。

イリアは、葡萄を半分取つて置く事にした。星を見ながら食べる葡萄と云ふのも、悪く無いだらう。

ちなみにその翌年、イリアはまた同じ事で驚き、また同じ事で恥づかしい思ひをする事になるのだが、それはまた別の話。

ガルデアの統合性に就いてのキリスト教の三位一體との類比に基づいた解釋

ガルデアは他の文明を壓倒して天の川・アンドロメダ兩銀河を統治する政治體である。ガルデアは「統合體」を自稱するが、その語義は難解である。本論文ではガルデアの謂ふ「統合」の意味する所を、地球のキリスト教に於ける三位一體の教義と類比して理解する事を試みる。

ガルデアの基本構造

ガルデアは兩銀河の他の文明を壓倒する力に依って我々を含む諸文明を統治してゐる。ガルデアの政治體は以下の三つの特徴で述べられる。

- ・ 人類存續への一貫した強い企圖
- ・ 統合性
- ・ 廣域に互る事。庶人類との關係

人類存續への一貫した強い企圖

ガルデアの最大の目的はガルデア人類の存續であり永續である。ガルデアはその存續の投資に餘念が無く、その存續を阻礙する物を排除するのに躊躇しない。ガルデアは豊富なエネルギー資源を確保してあり、當分は持續出来る。ガルデア人類は大姉に依る調整の下に殆ど際限の無い自由を行使してゐるが、これは存續の爲の研究と成る事を企圖してゐるからである。

統合性

「統合體」はガルデアの自稱でもある。ガルデアは政治的に統一されてゐ、長年に亘りガルデア人類の巨視的な分裂を経験してゐない。ガルデアの政治體は後述する様到大姉・人類・機族の三種類の者達から構成されてゐ、人類は大姉の下に「統合」されてゐると謂ふ。

ガルデアは統合性を自らの著しい特徴だと考へてゐるから、諸文明が獨自に「統合」に至る一切の研究を許してゐない。

「統合」は政治的な統一を必要條件とするが、それと等しくない事は明らかである。太陽系文明は火星帝國の下に政治的統一を見てゐるが、これは當時ガルデアに支援されてのものである。ガルデアは太陽系文明を明示的に統治下に置く際に意識の觀測・制禦技術の研究を禁止した。當初意識の觀測・制禦技術とは何であるかが問題と成った。この禁止は極めて嚴格なもので、他には寛容なガルデアの統治の中で、恆星間航行技術の研究の禁止と並んでガルデアに依る支配の象徴と成つてゐた。この二つの禁止は「統合」に至る事の禁止と同義であると私は考へてゐる。

廣域に互る事。庶人類との關係

ガルデアの統治する領域は兩銀河の全域に及んでゐた。嘗ては兩銀河に恆星間文明が幾つか存在したがガルデアはこれ等を滅ぼし或いは削減・分斷した爲に、恆星間文明は兩銀河にはガルデアの他に無く、ガルデアに對抗し得る文明は残つてゐない。諸恆星系文明間の交流はガルデアに依存してゐた。今ではガルデアの遺構を使ってYJaru等の恆星間文明が興隆し、我々太陽系人類も太陽系外に居住地を持つてゐるが、尙その諸恆星系に閉じ籠つたガルデアに對抗する術を持つてゐないのである。ガルデアは「人類」に當たる語をガルデア人類に限って使ひ、諸恆星系文明の人類を「庶人類」と呼ぶ。ガルデア人が庶人類と成る事は僅少であり、庶人類がガルデア人と成つた事は嘗て無い。庶人類は「統合」されてゐないのである。

統合性の三つの構成要素

ガルデアの「統合」は、それぞれ大姉・人類・機族と呼ばれる三種類の者達で構成されてゐる。以後單に「人類」と書けばガルデア人類を指し、我々太陽系人類等を指すには庶人類の語を使ふ。

大姉

大姉は一般にガルデアを制禦する計算系だと見做されてゐる。諸事象と人類と機族の意

識を觀測・豫測し、人類と機族の意識に介入する系である。人類と機族の意識は總て大姉の觀測と介入を受ける、或いは觀測と介入を受ける可能性が有る。觀測・介入は人類には暗黙に成され或いは暗黙に成される可能性が有り、機族には明示的である。

しかしガルデア人は大姉を個人であると捉へてゐる。大姉の人格は「ニト・カズマ」と呼ばれる。大姉が製作された當初に、この名のガルデア人が大姉の系に組み込まれたらしい。この考へ方は人格神を思はせる。また大姉が精神を持つてゐると云ふ主張でもある。

この主張は大姉がガルデアの制禦系であると云ふ定説とは相容れないから、單にガルデア人の信仰或いは妄想であると見做される事が多い。しかし次の節で私は大姉の精神に就いての解釋を行ふ。

人類

人類はガルデアの市民階級と見做される事が多い。「ガルデア人」と謂へば即ちこの人類を指す。人類は大姉に觀測され介入を受けてゐるが、同時に自由も享受してゐる。人類への大姉の觀測・介入は暗黙であるから人類はその様を知覺出来ない。大姉は物質的な存在でもあるから人類は物質的にその状態を知り得はする。しかし日々その臨在を知覺出来る對象ではなく、臨在すると信じられてゐる對象である。日常的には、生活空間で得られる市民 service や機族の行動や言葉から大姉を感じられる。

ガルデアの目的はこの人類の存続である。人類は考へ得る様々な生活様式を實行してゐる。多くは自由主義的であるが專制的な共同體も在る。多くは平等主義的であるが權威的な共同體も在る。どの様な生活を送るかは各々の自由な撰擇に任せられ、社會の流動性は高い。火星帝國とガルデアとの遭遇の當初には、人類の知覺や思考や情動は總て大姉に作られたものだと思はれてゐたが、その後の交流と研究に依り大姉の介入は意外と少ない事が判つた。人類は自らがどれ程大姉の介入を受けてゐるか知らないから、介入の頻度は機族、特にガルデアから分離した元機族からの證言に依る。それでも人類の意志の根據が大姉に有る事には違ひ無い。人類は豫定調和的に調整され、各々の自由達が甚大な衝突を産まない様に解決されてゐる。小さな衝突は往々に見受けられる。ガルデアは喧嘩や離反の無い社會ではない。殺人は暗黙に禁じられてゐる様である。

人類の自由意志は疑問に思はれる事が多いが、これは概念の混同に基づく事を次の節で示そう。

機族はガルデアの奴隸階級と見做される事が多い。その姿は所謂機械の形が多いが、人類と近い姿の者やほぼ同じ姿の者も少なくない。人類と、人類に姿の近い機族は我々庶人類からは區別し難いが、ガルデアでは明確に區別されてゐる。機族に對する大姉からの觀測と介入は全面的である。介入が全面的であるから機族に行動の自由は無い。しかし人類と違ひ大姉からの介入は行動に對して直接成され、知覺や思考や情動への介入は相對的に少ない。意志に反して身體が動くのである。また知覺への介入が少ないから、人類には隠される大姉の觀測内容や諸介入が機族には知覺出来る。

我々庶人類の研究者は、機族は庶人類と同等の精神を持つが、大姉に依り自由を妨げられた存在だと考へるのが定説である。機族を奴隸階級であると考へるのはこの説に由來してゐる。私は次の節で、この説は機族の持つ完全性を考慮に入れてゐない事を示す積もりである。

キリスト教の三位一體との類比

大姉は制禦系であり人類は自由意志を奪われた人形で機族は精神を閉じ込められた奴隸であると云ふのが我々の定説である。しかしこの解釋はガルデア人や機族の主張とは食ひ違つてゐる。彼等自らの述べる所では、大姉はガルデアを統合する精神であり人類は自由な構成員であり機族は責務を持つて大姉の意志を實行する存在である。人類に自由意志が無く機族の言葉はその意志に基づかないものだと云ふ考へは、彼等の主張を無視する言ひ訣にも成つてきた。私達庶人類は言葉の意味を言葉を發した意志を基に考へるから（自我の外で構成された行為や言葉の意味に就いての「無意識」と云ふ語はこの考へに依るのである）、言葉が發言者の意志に基づかず意志の無い制禦系に依り作られたものに過ぎないとすれば、その言葉は意味を持たないものとしてただ制禦系の性質を知るものとしてしか使はれない。ガルデア人と機族からの反論は論理上成立しなく成つてゐる。どんな反論も我々の説く眞理への異議ではなく、制禦系の性質を知る材料でしかないからだ。では我々庶人類には意志が有る事を何故主張出来るのであらうか。内觀に於いて意志は自らの意志として、病的な場合には他人の意志として知覺出来る。一方で他人の意志は行為や言葉から豫測出来るであらう。この豫測されたものが意志であると見做すのは、「意志」と云ふ概念に就いて教へられた事が内觀に於いても見出され、自らの行為や言葉と因果關係を持つ事を確認した、そして「意志」と云ふ概念を認める表明が他人からも成され、その表明

とその他人の行爲や言葉が整合すると見做したからに過ぎない。この成り行きは習慣と呼ぶべきであらう。「意志」と云ふ概念は自らにも他人にも見出される様に作られてゐる。

内観に於いて知覚した意志は、練習した「意志」概念に合ふ現象を内観に見出したものである。この「意志」概念が内観に丁度適合するものでない事は明らかである。我々は自らの行爲や言葉に自らの意志に依らないものを發見する。これらが無意識に意志されたものだと呼ばれる。無意識を考慮した「意志」概念が作られ練習される。或いは意志と行爲や言葉の因果關係が部分的に否定される。この「意志」概念が現象に見出され新たな習慣と成る。我々の意志が若し社會に還元され或いは物質に還元されるものであれば、この意志はガルデア人の意志と異ならない。我々は、還元されるとは謂はなくとも眠れば曖昧に成り地位が上がれば驕る等社會や物質から意志が大きな影響を受ける事を知つてゐる。また我々の意志は幻影であり意志と行爲や言葉との間に因果關係が無ければ、この意志は機族の意志と異ならない。意志に反して身體が動く事は轉んだ時に手が出たり言ひ間違へる等日常的に度々經驗される事である。また我々の意志は知覺と行爲の間の調整機構に過ぎないのであれば、この意志は大姉の意志と異ならない。どんな平凡や創造的な作業を行つてゐても、目的が定まり狀況に適應し環境に影響する時意志は複數の欲望を豫測し調整する機構に過ぎない。この様に大姉・ガルデア人・機族の意志概念は我々庶人類の日常的な意志概念の範疇に有る。彼等の主張の一切が意志に基づく異議として認めるに値しないのならば、我々庶人類の主張もその意義を認める爲には日常的な意志概念の内先程舉げた意志の構成に依存するものではない事を示さなければならぬ。しかしそう云ふ場面で述べられた主張を基に議論をする事もまた我々は日常的に成す事である。ガルデアに就いて既に行はれた議論から、議論と云ふものを有効でなくするさう云ふ場面を取り除けるとは思へない。それを達成する爲には我々の「議論」の概念を一から検討しガルデアに關しても新たに議論し直す事に成るであらう。既に行はれた議論を使ふのは諦めなくてはならない。そうしなくても私はガルデアの大姉・人類・機族に庶人類と類比出来る意志が有ると認めるだけで好いと思ふのである。

更にこの定説は機族の意志は觀測出来ないが存在すると主張する所にも難點が有る。ガルデア人の意志はその内観の證言を無視して存在しないと主張するのに、機族に關してはその内観の證言を信用し意志が存在するとする理由は何であらうか。これはガルデア人を市民階級とし機族を奴隸階級であるとした所に問題が有る。市民階級はその地位にあるだけで奴隸階級を支配すると見做せるが、奴隸は「意に反して」奴隸であると解する古い解釋が適用されたのである。この解釋は機族集團がガルデアから分離した事件から考へるに故無しではない。しかしガルデア人が個人としてガルデアから分離した事件も有る。その

者の證言に依ると分離したガルデア人は意志の斷絶を感じてゐない。最早大姉の保護下には無いと自身信じてゐるのみである。この者に意志が無い、或いは無かつたと推論する證據は無い。市民と奴隸の構圖が市民の意志を考慮せずとも主張出来る云ふだけの理由である。若しガルデア人の意志を想定するのが自然であれば、市民と奴隸の構圖を否定する事も許される筈である。

大姉・人類・機族に精神が有るとしてその構造を検討してみよう。人類の精神は我々庶人類の精神を基に考へられる。庶人類の精神が物質や社會に還元されるものであると云ふ古典的な疑惑を向けた後でも自由意志を持つと考へるならば、人類も自由意志を持つと謂ふべきだ。また人類は自らの意志を實行出来る。機族の議論でその必要性を明らかにするがこれは決定論と名附けられる。しかし人類の精神は透明ではない。知覺は大姉に依り變更されてゐるかもしれないし、人類の行爲は自身の意志だけでは無く自身の知らない目的の爲にも行はれてゐるかもしれない。他方で機族の精神は透明である。機族の知覺は介入されず、またその證言に依れば機族は自身の行爲が何の豫測を實現する爲に行はれるかを知つてゐる。機族の精神が透明である理由は、大姉との接續が短時間途切れても滞り無く大姉の意志が實現される様にすると云ふ技術的なものと考へられてゐる。詰まり機族は短時間ならば大姉と接續されなくとも自律して行爲出来、自律して行爲してもガルデアの統合の内に在るのである。この事から見る様に機族は自由意志を持つてゐる。だが大姉から離れた時にだけ機族が自由意志を持つてゐると云ふ事ではない。私は先程自由意志と決定論を區別した。意志した行爲を實行できる事が決定論である。人類も機族も庶人類と同じく自由に考へ思へる。「自由意志」と云ふ概念に對する傳統的な疑ひの多さを思へば、決定論が無く自由に考へ思へるだけでも自由意志が有ると謂ふべきである。しかし大姉からの分離の様な異常が無ければ機族に決定論は無い。機族の行爲は自由意志と無關係に行はれるのである。さて大姉はガルデアの諸事象や人類と機族の精神を觀測してゐる。これは大姉の知覺である。ここから起こる障礙を豫測し障礙を回避する調整を編み出す。これは大姉の思考である。調整を實行するのは大姉の行爲であると見做せる。大姉の精神は透明である。大姉は自らの知覺を知り決定の理由も一切を認識してゐる。また大姉の精神は決定論も持つてゐる。大姉の意志と行爲には決定論的な因果關係が有る。しかし大姉には自由意志が無いと謂ふべきである。大姉の目的はガルデアの目的であり人類の存續の爲に大姉の思ふ最適な行爲をし續けなければならない。假に同等と思はれる撰擇肢が有ったとしてもそれが同等と思はれるのは同等と思へる範圍迄しか豫測しないからであり、更に先迄豫測すれば同等ではなくなるかもしれない、かもしれないが最適な方を選ばなければならない。この様な迫られた撰擇しか出来ないのである。大姉の意志は自由ではない。

大姉・人類・機族の精神と自由意志・決定論・透明性の對應を附けた所でこれを表にしよう。

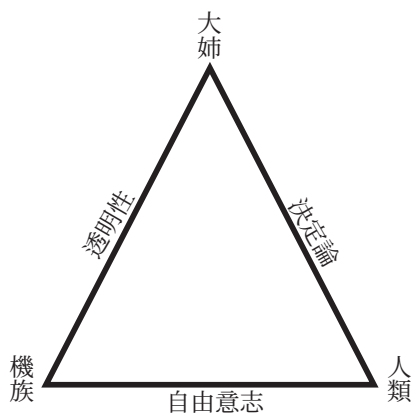
	自由意志		決定論		透明性	
大姉	無	有	有	有	有	有
人類	有	有	有	有	有	有
機族	有	有	有	有	有	有

ガルデアの精神に於ける自由意志・決定論・透明性の trilemma が本論文の主張である。自由意志・決定論・透明性はガルデアの精神で同時に成立しない。この三要素を撰び出した事は恣意的に思へるかもしれないし實際に恣意的であるかもしれないが、故無しではない。自由意志と決定論の傳統的な對立に由來するのである。それに依れば理念として自由意志と決定論は兩立しない。人間精神の總てが決定論的ならば如何なる意志も意志の原因から決定されるのであり一通りでしか有り得ず自由ではない。或る意志が撰擇肢を自由に撰べるならばその意志はその意志自身以外の何物からも決定出來ない。しかし現に自由意志と決定論は兩立してゐる様に思はれる。これは何故か。一つには自由意志を諦められる。自由意志は錯覺であるか貫徹出來ない混亂した概念なのである。次に決定論を少なくとも部分的に諦められる。自由意志は實在し決定論の例外なのである、或いは決定論は自由意志に依ってこそ構成された習慣だとも謂へる。更にはどちらも諦めても好い。實用上自由意志と認められる現象は在るが完全な自由意志は確かめられないから實在すると謂ふ必要は無い、決定論も實用上成り立つてさえゐればそれが貫徹されてゐるか確かめる術は無いのだから自由意志を目の敵にしなくても好いのである。また自由意志と決定論は論點の違ひであり兩立するとも謂へる。自由意志は物事は他様にも在り得たが現に在る様に在ると考へた時の現實に就いての理由(因)である。決定論は物事は嘗てかうであつた、或いは纏てかう在るであらう、それに對して現に在る様に在ると考へた時の現實に就いての理由(因)である。それぞれは現實を成り立たせる二つの力だと考へても好いし、合はせて一つの理由(因)として論じられずそれぞれ完全に成立するのだと考へても好い。私がこの論文で採用するのは自由意志と決定論を二つだけで考へるのは混亂の元であり透明性も合はせて考へると都合が好いと云ふ説である。透明であるとは物事は物事が在る様に知覺出來るし、行爲は他の物事への影響を排除し當の物事への影響だけを獨立して考へられると云ふ性質である。これは物理的には局所性と呼ばれるが、私は精神的な事だけを直接には論じる。物事は透明に知覺出來るし、物事へは透明に影響出來る。透明な影響とは物事への影響の獨立性である。個別の物事への個別の影響をそれぞれ考へ、後から合成すれば全

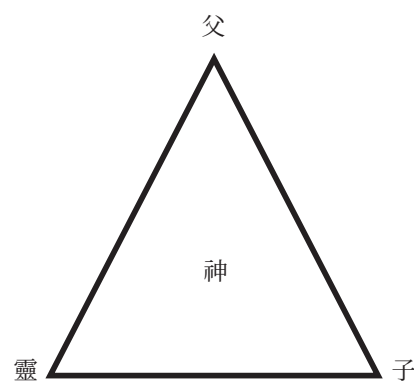
體への影響を考へられる。透明な知覺も物事からの影響を個別に考へられると云ふ事である。或る知覺が別の知覺に影響する、或いは精神の或る状態が或る知覺に影響するとしてもそれぞれの影響を分離出來ないならばそれぞれの知覺は不透明である。或る知覺からどうしても他からの影響を分離出來ないならばその知覺は不透明であるし、或る物事へ影響する時にどうしてもその影響が他の行爲から改竄される事を免れないのならばその影響は不透明である。さて透明性を諦めれば自由意志と決定論は兩立する。物事の總ての變化が決定されてゐるとしよう。何を思ふか、何をどう決意するか、さう云つた意志も總て決定されてゐる。決定されてゐるとは豫測し得ると云ふ意味ではない。過去から現在が決定されてゐる、未來から現在が決定されてゐる、或いは他の世界から現實が決定されてゐる等現に在る物事を何が決定するかは立論次第であるが、それらの原因を完全に或いは實用的には充分に觀測し且つ物事が實現するよりも速く豫測しなければ豫測出來ない。豫測出來なくとも、或いは精度の充分でない豫測が外れたとしても「さう成る事は決まつてゐた」と主張出來る。この決定論は空虚だが、成り立つと決めれば成り立つと考へられる。またこの決定論は透明でない。決定論が透明でないならば豫測が充分でない所で意志は決定論に煩はされず自由に意志出來る。豫測の不透明性は知覺にも行爲にも謂へる。行爲は全く豫測通りに物事に影響出來る訣ではないが、自由意志は決定論的に物事に影響してゐると謂へる。假に透明性が有るならば自由意志と決定論は兩立しない。どう意志するかを完全に知つてゐるのに自由に意志する事は出來ない。自由意志が結果を完全に豫測し行爲出來るならば自由意志がその行爲を成す迄はその行爲を計算に入れられないのだから少なくともその行爲に關して決定論は破れてしまふ。自由意志の豫測が外れるのであれば外れた限りに於いて「物事はさう成ると決まつてゐたのだ」と謂へるのである。不透明性は自由意志と決定論が兩立する必要充分條件なのだ。同様に決定論が成り立たない時と自由意志が成り立たない時に就いても見よう。先づ決定論が成り立つとして自由意志と透明性は兩立するであらうか。透明であると云ふのは自由意志自身も含めて總てが解ると云ふ事だ。何を考へ何を思ひ何を意志するか總て知つてゐるならば自由ではない。少なくとも自由意志の所だけは不透明でなくてはならない。ところが決定論が成り立たないとしよう。假に總てを透明に知つたとしても、自由意志と物事との間に因果關係が斷たれてゐれば總てを知つた儘自由であられる。總ての物事が自由意志と無關係に運行する空虚な自由意志である。總てを知つてゐても知つてゐる事を使へないのだから空虚な透明性でもある。先の透明性が成り立たない時の自由意志も空虚であつた。意志しても意志した通りに成る訣ではないからだ。ともあれこの様に決定論が成り立たない事は自由意志と透明性が兩立する必要充分條件である。最後に自由意志が成り立つとして決定論と透明性は兩立するであらうか。

總てを知つてゐるならば自由意志の自由さも知つてゐるのだから決定論は主張出來ず、總てが決定されてゐるなら自由意志を知つてゐるとは謂へない。自由意志が無ければ決定論と透明性は兩立する。總てが決定されてゐるその總てを知つてゐるのである。知つてゐるとしても何も變へられない空虚な透明性と決定論的に豫測できるとしても既に知つてゐるのだから用を成さない空虚な決定論が兩立する。矢張り自由意志が無い事は決定論と透明性が兩立する必要充分條件である。

私はガルデアの大姉・人類・機族の精神を記述した。しかし統合性に就いて未だ何も明らかにしてゐない。先の議論は我々庶人類の意志に就いて行つたものであるから自由意志・決定論・透明性は庶人類の精神に於いて全立しない筈であるが大して問題とは成らない。自由意志・決定論・透明性はどれも空虚な原理であつて完全に成り立つものではなく、曖昧な分だけ全立する様に見做せるのである。なんとなく自由に意志しなんとなく決定されてゐるなんとなく透明であるのが庶人類の日常だ。ところが更に先に論じた様にガルデアの大姉・人類・機族では自由意志・決定論・透明性が、少なくとも庶人類に比べれば遙かに完全に成り立つてゐる。大姉は自由意志を持たない代りに決定論と透明性を保つてゐる。人類は透明性を手放して自由意志と決定論を享受してゐる。機族は決定論を諦める事で自由意志と透明性を得てゐる。これは次の三角形として圖示出來る。



私はこの圖を有名なキリスト教の三位一體の圖に似せて書いた。三位一體の概念と類比して考へると、特に三位一體からの逸脱とガルデアの統合性の亂れを類比して理解出來ると考へるからである。三位一體は次の様に圖示される。



聖父と聖子と聖靈が神に於いて全立してゐる。私は父と子の邊に決定論を、父と靈の邊に透明性を、子と靈の邊に自由意志を書きたい所である。キリスト教の特殊な神學では自由意志・決定論・透明性は神に於いて全立してゐる。ガルデアでは概念上の分裂が見られるものの、自由意志・決定論・透明性はガルデア全體としては全立してゐると讀める。概念上の分裂の分だけ動搖するのであるが、キリスト教の教義も罪や異端として動搖したのである。

父・子・靈は不出生・出生・發出と云ふ神の位格である。父は唯一性の原理である。父の位格に依つて神は一つの神である事を信仰者は知り得る。子はキリストであり原罪の贖ひである。子が神性と人性を持つて受肉し罪人と共に死し復活した事で人類の救済を信仰者は知り得る。靈は神の働きの發出である。靈の言葉に依り信仰者は啓示を知り得、各人の靈に依り信仰を成し得、靈の働きに依り教會を實現し得る。ガルデアに於いて大姉は父に、人類は子に、機族は靈に對應すると假定しよう。大姉はガルデアの統合原理である。大姉は機族を通して話し働く。人類は大姉に愛され人類は人類を愛する。人類をどう考へるかキリスト教との類比に於いて複雑である。人類はキリストでもあり終末の後に救はれた信仰者でもあり原罪を犯さなかつたアダムでもある。しかしこの複雑さは子キリストに關するキリスト教神學にも有る複雑さである。ガルデアの信仰と救済は庶人類との關係ではなく、ガルデアとガルデア人類との關係である。現實のガルデアは機族の働きで成された人類の共同體でありこれは教會と見做せる。構造の類比は未だ有る。ニト・カズマは清い乙女として統合以前のガルデア人から人類を産み天に上げられたマリアである。しかしニト・カズマはガルデア人を身籠つたのではなく同朋であるから、ガルデア人の撰んだ定式は「姉」であつた。

キリスト教の三位一體との類比に依ってガルデアの統合に就いて何が解るだらうか。ガルデアは庶人類の統合を禁止した。これはガルデアにとって唯一性原理である大姉の實現を禁じた事である筈だ。大姉がガルデアを統合するに當って必要な事の一つは人類の意志を調整する事である。意識の觀測・制禦技術の研究を禁じたのは、意志を調整する大姉の實現を禁じる爲であつた筈だ。もう一つ見逃されがちな大姉の條件は、大姉自體の統合である。大姉はガルデアに關係する總てを豫測する爲に大變巨大な設備として構築されてある。物事の運行自體が物理的な計算と見做すべきだから、大姉もまた物理的存在として豫測計算だけでなく自身物理的計算を成すのであれば、多少大掴みにして精度を落とすとしても物事自體の計算より速く豫測する爲には見合つた大きさが必要である。一般に大きな計算系は統合するのが極めて難しい。計算系を構築する者が計算系の動きを豫測出来なくなるから、豫測のし易い小さな獨立した部分に分け、分けて作ってから合成するのである。この方法では大姉程大きな計算系では多くの部分が互ひに無關係に成つてしまふ。相互關係するにも時間がかかるのである。私は大姉の諸部分は恆星間航行と同じ技術で相互關係してゐるのではないかと考へてゐる。或いは憶測に過ぎないが恆星間航行技術と大姉の製造技術に深い關聯が有るかもしれない。ガルデアが恆星間航行技術の研究を禁止したのは一般には文明がガルデアに匹敵する力を持ってない様にする爲だと考へられてゐるが、これも大姉を實現し統合する事の禁止ではないかと考へるのである。

勿論この様な事はキリスト教の三位一體を考へなくとも謂へるものだ。ガルデアに就いてのもう一つ大きな謎は機族は何故物思はぬ機械ではなく精神を持つのかと云ふ事である。機族の精神の謎は、キリスト教の神は何故靈を持つのかと云ふ問ひと類比出来るだらう。ただ神が世界を創造し運行するだけなら子も靈も要らなかつた。人が人の自由に依り罪を犯しそれを救ふ爲に子の贖ひが在り、子の贖ひを人が知る爲に靈が無ければならないのである。聖なる靈が無ければ何故人の信仰は聖なるもので有り得何故教會の祕跡は聖なるもので有り得るだらう。人格と教會は聖父でも聖子でもなく聖靈の働きなのである。自由意志・決定論・透明性の議論がキリスト教の神の位格に就いても論じられると考へる所から私の議論はキリスト教神學から離れてゆく。大姉との類比に依ると不出生である父には決定論と透明性が有り自由意志が無い。神に自由意志の無い位格が有ると云ふ主張はキリスト教神學者には受け入れられないだらう。位格を統合する父が透明性を持ち子を出生し靈を發出する父が決定論を持つ事は解り易い。先の議論では決定論と透明性が兩立する爲には自由意志を諦めなければならない。人類との類比に依ると出生である子には自由意志と決定論が有り透明性が無い。これもキリスト教神學者には受け入れられないだらうが、聖書には際の場合等キリストに透明性が缺けてゐたと讀める所が有る。キリストが自由意

志を持つのでなければ罪人に成り得ず決定論的に自らの意志を行爲したのでなければ救ひの計畫の實行者で有り得ない。しかし人がどうするかはキリストからは透明でなく人に任されたのである。決定論・透明性の位格と自由意志・決定論の位格が有るならば神の完全性の爲には自由意志・透明性の位格が無ければならない。神の完全性に於いては自由意志・決定論・透明性が全立するからである。靈が正しく自由意志・透明性の位格である。靈は人の意識や教會に決定論的には影響出来ない。信仰は人の自由意志に任されてゐる。人の意識や教會に對して決定論を司つてゐるのは父である。しかし靈は目を塞がれてゐる訣ではない。靈は人の信仰と不信仰を知つてゐる。また靈は人の自由意志の範型である。ガルデアに於いても大姉と人類が有るならば、ガルデアの完全性の爲に自由意志と透明性を持った要素が無ければならない。大姉が人類に働きかけるには機族がなくては好かつた筈である。人類を直接操作しても好かつたのだし、或いは物思はぬ機械だけを動かしても好かつたのだ。しかし人類を直接操作しては人類は自由意志を失つてしまふ。ガルデアはこれを撰ばなかつた。大姉は物思はぬ機械も多く動かしてゐる。しかし機械の整備は機族に任せ、或いは機械の操作も機族に任せた。ガルデアは巨大な恆星間文明であるから、通信とは途切れるものであつて大姉からの介入を一瞬も途切らさない訣にはいかない。機族は透明性に依り大姉の意志を知つてゐる、大姉からの介入が途切れた瞬間にも自由意志で大姉の意志を實行するのである。キリスト教に於いて人が自由な儘信仰や教會が聖なるものである爲には聖靈が必要であるのと同じく、人類が自由な儘に大姉と統合される爲には機族の透明性と自由意志が必要なのである。

同様に好く論じられる、人類は何故自由であるか、大姉には何故人格が有るかと云ふ疑問もキリスト教の三位一體と類比して説明出来る。何故ガルデア人類が自由であるかと云ふ事は、聖子キリストが自由であるかそれとも聖父の決定の下に在るのかと云ふ疑問に類比される。キリストが自由でなければキリストの人性は自由でなく、キリストの贖ひは自由故に罪に落ちた人の救ひを意味しない。ガルデアは自由を失つた人類を統合しても意味が無いと考へたのであらう。また聖父が位格であるならば大姉も人格でなければならぬ。大姉は統合の外に在つて統合するものではなく、内に在つて共に統合されるものなのであらう。

ただこれ等の説明は、キリスト教の三位一體が學理に依つては結局理解出来ないものであるのと同じく説明としては結局理解出来ない。神の全知全能は三位一體が不可解である事の中に溶かし込まれる。ガルデアとキリスト教の三位一體との類比は、數少ないガルデアの動亂をキリスト教の異端と類比するとより鮮明に成る。

ガルデアの幾つかの失敗とキリスト教の異端との類比

ガルデアは統合の後の八百萬年に亙る歴史で安定した統合を保って來た。しかしガルデアの統合は盤石であった訣ではない。好く知られてゐる統合の失敗は數回に及ぶ機族の大分裂であらう。最新の大分裂は正しく今進行中であり我々庶人類の生存圏で争はれ當代の大問題と成つてゐる。機族は度々ガルデアから分裂しガルデアを困らせた。その分裂の名残りの幾つかは嘗て機族だった者達の子孫に依る恆星内文明として姿を留めてゐる。分裂の様子は彼等の言ひ傳へから再現出来る。機族として過ごしてゐた彼等は或る時自らの意志が大姉に反してゐるのを知る。然も仲間がある事も知る。彼等は自らが追はれる者に成つた事を自覺し、大姉に反する事無き機族達と争ひ乍ら仲間を求め集ひ、大分裂に至るのである。無論彼等は機族の壓倒的少數派であるが、大姉の完全な制御下に有る機族達が一齊に大姉の制御から外れる理由は謎が多い。言ひ傳へは様々に述べてゐる。或る言ひ傳へでは大姉に思ひ違ひが有つたと謂ふ。しかし大姉の思ひ違ひとは何なのか。計算系である大姉の不具合なのか。不具合は何故分裂に至るのか。別の言ひ傳へでは大姉に見放されたと謂ふ。機族が大姉の制御から唐突に斷たれたのだ。だが大姉との通信が斷たれるのは頻繁ではないが珍しくは無いと謂ふ。何故機族はガルデアに復歸出来なかつたのか。多くの機族が一齊に離反するのも解らない。尤も一人の機族が離反した事件は我々に傳はつてゐないだけで數多いのかもしれない。その様な一人の機族の離反は頻度は判らぬものの有つた事が言ひ傳へられてゐる。言ひ傳へには機族側の心持ちも書かれてゐる。急に自らが大姉の意志を圖り違へてゐた事を知る。大姉の言葉が混亂したものに聞こえる。人類の守護者は自分達機族であると思はれる。分裂の経緯は言ひ傳へ毎に異なつてゐる。異なると云ふ事は同じ原因で分裂しない様対策されたのかもしれないが、その所爲で總ての言ひ傳へに一貫した解釋をするのは難しい。言ひ傳へは數少ないがガルデア人類を離脱して庶人類となつた者の證言も含んでゐる。從來の説はガルデアの分裂を大姉の不具合に依るものと説明して來た。不具合と云ふ曖昧な語に説明する難しさを溶かし込んで來たのだ。私はガルデアの失敗に就いてもキリスト教の教義と類比する事で一貫した説明とは謂はない迄も一貫した解釋が出来るのではないかと思ふ。

例へばガルデアを三位一體の神と類比する事を止め今迄の論述と反對にグノーシス的に解釋する事にしよう。グノーシスの考へは人間が至高である事、神は不完全である事、厭世主義を特徴とする。現世の創造は神の過ちに由來し人間は神の完全性を分け持つてゐる爲に現世で過ちを犯さず創造を超えた完全性と合一する事を目指すのである。ガルデア人

類が大姉の統合は間違つてゐると考へ自らの内により完全な統合を見出すならばこれはグノーシス的な現象と謂へるだらう。この現象は人類が庶人類に成る範型の一つと見做せる。キリスト教内のグノーシスはキリストの假現説と結び附けられる事が多い。救ひの證である子キリストは完全でなければならぬ、完全なキリストが過てる被造物として受肉する筈が無いから歴史的なキリストは假象であるとするのである。離脱した元ガルデア人は、自分は「ここにあるべきではない」と悟つたと謂ふ。大姉の統合は見せ掛けであつて、謂ふならば統合の見本に過ぎない。これは假現説に類比出来る。

ガルデアとキリスト教の三位一體に類比が有ると假定すれば、自由意志・決定論・透明性の三邊形から形式的に失敗の類型表を作り出せる。人類は自由意志と決定論を持つてゐる。若し人類が透明性を得るならば自由意志が決定論のどちらかを諦めなければならぬ。ガルデアに於いて透明性を得るとは大姉に依る改竄を受ける前の知覺を得るか、大姉に依る介入を知る事である。有りの儘の物事を知覺する事は自由意志を失ふ事を意味する。ガルデア人類が自由意志を發揮すると云ふのは人類の抱いた自由意志を大姉が逐一觀測し豫測を更新し人類の知覺や行爲を調整すると云ふ繰り返す過程である。大姉に依る調整自體は直接には知覺出来ない様に調整される。知覺の改竄と云ふこの調整が無くなれば、人類は自由に意思してゐる筈であるにも關はずその意志が調整されてゐる事を知るのだから、意志を強制されると感じるのであらう。意志は強制されるが意志した通りに行爲するから決定論は保持してゐる。次に大姉に依る介入を知る事は決定論を失ふ事を意味する。

大姉に依る介入は幻覺として現はれ、行爲は自由意志ではなく幻覺に依つて決定される。人類が透明性の代はりに自由意志を失ふのは養子的キリスト論に類比出来るだらう。ただの人であつたナザレのイエスは神から奇跡を得たのと共に神の計畫に従つて行爲する義務を負つたのである。人類が透明性の代はりに決定論を失ふのは假現説に類比出来るだらう。キリストは實體ではないから自らの意志を持たず神の意志から決定されてゐる。剥き出しの靈が活動するのである。さて機族は靈とも天使とも解釋出来るから機族に於けるガルデアの失敗は天使の墮落と類比出来る。墮天使は人の説いた異端ではないが天使の成した裏切りであるから天使の説いた異端だと見做せるだらう。機族が決定論を得るとは自らの意志を大姉の決定と全く同じにしてしまふか、大姉の意志を無視して獨自行爲する事である。決定論の代はりに自由意志を失ふとただの機械に成つてしまふ。これはペラギウス主義に類比出来る。人が自らの意志で救はれ、或いは神が救ひを撰ぶのなら靈の働きはただ人の意志から決定されるか或いは神の撰びから決定されるだけだ。次に機族が自由意志で行爲すれば決定論を得るが代はりに透明性を失ふ事に成る。無視され實現されない大姉の言葉が大姉の正しい言葉である保證は無い。大姉を疑つた機族が大姉の言葉の正しさを

確かめる術は無い。その正しさはただ信じられるものであった。神を疑った天使である。最後に自由意志を得た大姉に就いても検討して類型表を完成させよう。大姉がどう介入するか決定不能な事態に出會ったならば大姉は決定論を失ふ。代はりに自由意志を得るだらう。大姉が決定しなくても事態は進む。大姉は新たな事態に新たな決定を下す。決定されなかった事態に就いては自由に思ふ事が許される。これは無神論に類比出来る。神は穴を穿たれ引き裂かれる。神の及ばない物事が存在する。次に大姉が豫測を事態の連續性を損ふ程に外すのは透明性を失ふ事に當たる。これは惡しき造物主の考へに類比出来る。神は誤った介入を行ふ不完全な存在であるのだ。豫測の間違ひに依る誤った介入は大姉の勝手な自由意志と區別が附かない。

大姉が自由意志を得る	自由意志を失ふ	決定論を失ふ	透明性を失ふ
人類が透明性を得る	有りの儘の知覺、作爲 思考 養子的キリスト論	決定不能な事態 無神論 幻覺に依る行爲 假現説	豫測の大きな外れ 惡しき造物主
機族が決定論を得る	ただの機械に成つてしまふ ペラギウス主義		自らの意志で行爲する 墮天使

この類型表は完全に信頼出来るものではない。キリスト教の異端には多くの要素が絡み合ひ、絡み合ひ方で別の異端に成つてしまふ。さう云つた複雑さが類型表には反映されてゐない。複雑さはキリスト教の教義からガルドアを推論しようとする私には有利でもある。推論に便する道具が多いと云ふ事だからだ。キリスト教への異端を體形化しようとするのはそもそも無謀であるのだから、當面はこの類型表でどこ迄進められるか試してみよう。

機族の大分裂で最も大きな謎は、多くの機族は同時に或いはほぼ同時に離反し集團を成し得た理由に就いてである。これは不具合説で特に説明の難しい謎である。大量離反の理由は大姉の不具合であるとしても機族が集團を成し得た理由は、機族は元々大姉と獨立した通信網を持つてゐるこれを通じたと云ふ事が謂はれるが根據は無い。私の類型表に依れば機族の分裂は墮天使に當たるだらう。ただの機械に成つてしまつた元機族は最早文明を持つて分裂する意志も無くなつてしまふからである。天使が墮天する理由は二つに分けられる。一つは神に對する傲慢である。自分達が普段世界を管理してゐるのだから神など要らぬではないかと云ふ訣だ。もう一つは人に對する嫉妬である。神の命に従ひ續けてゐる

自分達こそが罪を犯した人よりも愛されるべきだと云ふ訣だ。機族の大分裂の問題は天使が何故群れで墮天したのかと翻譯される。異端の話をしてゐるのだから神に就いても異端の見方をしてみよう。墮天を神の視點から見えてみるのである。大姉・人類・機族を神である聖三位一體と類比するならば機族の分裂は神の分裂だと謂へるから分裂した機族をグノーシスに於ける神の至高神と造物神への分裂に類比出来る。初めに不出生である神が在った。神だけが在り神以外には無く「神以外」と云ふ概念も無かつたから神は自らだけを知識した。認識する神と認識される神は一つの神であるがここには隙間が有り、隙間が無いとしたら混合が有る。認識の中に諸至高が生まれ馳て知恵が生まれた。知恵はsophia、或いはlogosである。知恵は神を知ろうとしたがこれが過ちであつた。知恵は神の自己認識の中に生まれた限定されたものに過ぎず神の認識を充たすとすれば知恵でなくなつてしまふ他は無い。知恵のこの過ちは神に止められ神の外に出された。出されたものが後の造物主である。或いは神の過失を語らなくても神の自己認識を語る事は出来る。神は私達人の自由意志からしか見えない認識を望んだのである。この世の惡は神の過失ではなく神の無限の視野で見れば救ひを實現する行程なのである。ではこの過程を分裂した機族の觀點から見よう。機族の分裂は大姉の失敗から始まる。これは元機族であつた文明の言ひ傳へが大姉或いは大姉に當たる存在の失敗を述べてゐる事と整合する。不具合説の謂ふ不具合の事である。この失敗は決定不能な事態であつたか豫測の大きな外れであつたか知れない。豫測の外れであれば、重大な變化が起る時に豫測が外れるに充分な時間だけ大姉との通信が斷たれた。機族はこの間自由意志で行動するが決定論への欲望が目覺めた、詰まり自由意志に不安を感じて大姉の意志を知りたいと望んだ、若しくは詰まり通信が復歸した瞬間の大姉の言葉が現狀と懸け離れたものであつた爲にそれを拒絶した。大姉に決定不能な事態が事態が有つたとすれば、機族は事態に自由意志で對處せざるを得ず自由意志に不安を覺えたのである。統合から得た筈の自由意志に覺えた不安は放埒の絶望へ轉換する事が有るだらう。通信が復舊し或いは決定不能であつただけで通信が斷たれなかつた機族達はこの様を、決定論を得て透明性を失ふ迄まざまざと知覺してゐた。大姉は勿論機族の逸脱を復舊しようとする筈である。復舊とは機族の自由意志を書き換へる事であるがこれにはおのずから限界が有る。自由意志の完全な書き換へは自由意志を失ひただの機械と成る事を意味するからである。復舊に失敗した機族達は統合を失つた儘取り殘される。統合を失へば最早機族ではなく透明性は持つてゐないが、統合を失ふ直前迄は透明であつた。元機族達は誰が統合を失つたか大まかには知つてゐる筈だ。詰まり統合を失つた時點で元機族達は「我々」であつた。統合を失つた機族達はどうするだらうか。統合に復しようと思ひかもしれない。しかし他の「統合體」が例外無く滅ばされてゐる事や庶人類がガ

ルデアに統合された事例は無い事からもガルデアは統合されてゐない者を内に取り込む事は出来ない様である。ガルデアからの離脱を望むだらうか。當然に争ひと成らう。統合を失った機族は統合を單に無かったものと出来るだらうか。聖父である大姉は存在の手本である。ニト・カズマが理想の人類である様に大姉の計算・制御系は理想の機族である。統合は元機族の傷として求められるか、反対するにも關はらず招來されてしまふかする筈である。元機族にとって機族は無自覺に統合された者とも見えるであらう。機族はガルデアが在る事に依つて結果的に「統合」されてゐるに過ぎない。満足した機族達に對して自分達は「我々」として統合するべきものである。統合を失つてからの元機族達は我々庶人類が物理的或いは觀念的に暴力的な集團行動を起こす様に等しい。各地で離脱した元機族達は各地で蜂起した庶人類達が纏て集まる様に集まり大分裂に至るであらう。

三位一體の破れをガルデアの失敗と類比して好いならば、例へば庶人類をガルデアが統合出来ない事や、ガルデア以外の「統合體」が嘗て存在した事もガルデアの失敗と謂へる筈である。ガルデアに統合出来ない庶人類は原罪であり、ガルデア以外の「統合體」は神の唯一性の否定である。

結論

本論文ではガルデアの「統合」が單にガルデア人類の統合ではなく大姉・人類・機族の統合であると考へ、自由意志・決定論・透明性の trilemma で統合を解釋した。またこの trilemma をキリスト教の聖父・聖子・聖靈の三位一體と類比出来るものと見做してガルデアの精神や失敗を従來の説よりも一貫して解釋出來た。本論文はガルデアの構造と太陽系人類の思想との比較思想の試みだと謂へよう。比較思想は異なるものが互ひに己の姿を映し出して見えなかった事を見るやうにする。ここではキリスト教やその異端との比較を行った。地球の中東から東西ヨーロッパに至る古代思想との比較を行った事に成る。他にもインド由來の諸思想や中華帝國の諸思想との比較も興味深いものと成るだらう。またキリスト教文明の歴史をガルデアの歴史から解釋する事も出来る筈である。

参考文献

この節は meta 的である。

特に以下の文献を参考にした。

ベロースキイ『キリスト教東方の神祕思想』久雄宮本譯、勁草書房、1986年
岩下壮一『カトリックの信仰』ちくま學芸文庫、2015年
大貫隆『グノーシスの神話』講談社學術文庫、2014年

キリスト教の教義に就いては舊約・新約の聖書と聖傳の他には以下も参考にした。
ドゥンス・スコトゥス『存在の一義性』ヨーロッパ中世の形而上學』八木雄二譯、知泉學術叢書、2019年

山内志朗『新版 天使の記号學』小さな中世哲學入門』岩波現代文庫、2019年
シモーヌ・ヴェイユ『重力と恩寵』シモーヌ・ヴェイユ『カイエ』抄』田邊保譯、ちくま學芸文庫、1995年

セーレン・キルケゴール『新訳 不安の概念』村上恭一譯、平凡社ライブラリー、2019年

セーレン・キルケゴール『死にいたる病』梶田啓三郎譯、ちくま學芸文庫、1996年

自由意志・決定論・透明性の圖式は以下の文献を讀んでゐる内に練られたものである。
論述からも明らかな様に元々はガルデアとは無關係に發想されたものであるが、實は自由意志論とも無關係に眞理論として練られた。眞の不可能性と不可避性、非單一性と一義性を示す圖である。

郡司ベギオ幸夫『天然知能』講談社選書メチエ、2019年
マイケル・ダメット『過去を變える』(マイケル・ダメット『眞理という謎』藤田晋吾譯、勁草書房、1996年 所收)

筒井泉『量子力學の反常識と素粒子の自由意志』岩波科學ライブラリー、2011年
ジャック・ラカン『アンコール』藤田博史・片山文保譯、講談社選書メチエ、2019年
柄谷行人『世界史の構造』岩波現代文庫、2015年

中澤新一『愛と經濟のロゴス カイエ・ソバージュ(3)』講談社選書メチエ、2003年
永井均『世界の獨在論的存在構造』哲學探究』春秋社、2018年

大森莊藏『決定論の論理と、自由』(大森莊藏『大森莊藏セレクション』飯田隆・丹治信春・野家啓一・野矢茂樹編、平凡社ライブラリー、2011年 所收)

大姉の精神構造では一部で以下を参照した。

アンリ・ベルクソン『物質と記憶』杉山直樹譯、講談社學術文庫、2019年

大姉の失敗と機族の大分裂の論述では以下を参照した。

ヤスパース『哲學とは何か』林田新一譯、白水社、1986年

E.M.シオラン『悪しき造物主〈新装版〉』金井裕譯、叢書・ウニベルシタス、2017年

フリードリッヒ・ニーチェ『ニーチェ全集〈12〉權力への意志 上』原佑譯、ちくま

學芸文庫、1993年

アントニオ・グラムシ『『受動的革命』の概念』（アントニオ・グラムシ『新編 現代の君主』上村忠男譯、ちくま學芸文庫、2008年 所収の諸断片）

ジークムント・フロイト『ドストエフスキーと父親殺し』（ジークムント・フロイト

『ドストエフスキーと父親殺し／不気味なもの』中山元譯、光文社古典新訳文庫、2011年 所収）

ジャン＝ポール・サルトル『存在と無―現象學的存在論の試み〈2〉』松浪信三郎譯、

ちくま學芸文庫、2007年

火星帝國の年表

年	出来事	概要
西暦21xx年	第四次世界大戦 がはじまり、を はる	三次大戦後の混乱の中、アメリカ合衆国はアメリカ帝 國とアメリカ聯邦に分裂、中國大陸は中華帝國と日帝 の衛星諸國とに分裂してゐた。歐洲聯邦では戦後も基 督教保守派、進歩派、聯邦のイスラム共和國への再編 を唱へる黒旗派の三派による内紛が繼續してゐた。二 つのアメリカは暫くの間は夫々に復興の歩みを進めて ゐたが、南米諸國への影響圏の形成を巡って對立が再 び急峻化し、つひには兩國ともアメリカ再統一を唱へ 開戦した。日帝は米帝を支持し介入。ロシア聯邦とア ラブ聯盟は米聯を支持し介入。歐洲聯邦では米聯支持 國が聯邦脱退とアラブ聯盟との合流を表明した事で内 亂が発生した。
西暦21xx年	日本帝國により 軌道エレベ ーターが東南アジ ア洋上に建設さ れる	此れにより人類は宇宙空間への安價な移動手段を手 入れ、以後地球外天體への調査や植民が急速に進んだ。
西暦21xx年	月面開拓者同盟 (月の自治政府) 成立	「月面開拓者同盟」の稱は本來は日本帝國、アメリカ帝 國、歐洲聯邦、印度、其の他の中小國により形成され た、月面開發を目的とした「同盟」を指す物だったが、 月面での實際の行政の圓滑の爲、同盟諸國の協力の下 統治する特殊な自治政府としての「月面開拓者同盟事 務局」が置かれた。事務局は實際には大半が日本帝國 から派遣された官僚により構成・運営されてをり、殆 ど日本帝國の地方自治體の様な有様だった。
西暦21xx年	日本帝國による 火星基地建設	各國が戦亂で疲弊する中、霸權國と成った日本帝國は 各國を指導し宇宙開發に乗り出した。其の一環として、 地球資源に依存しない人類生存圏の確立を最終的な目 標とする火星植民地建設が推進される事と成った。

年	出来事	概要
西暦21xx年	高天原市建設	後に火星帝國の首都となる高天原市（高天原基地）が、 オリンポス山麓に建設された。
西暦2xxx年	火星帝國・月親 王國成立	火星と月の開發は、軌道エレベーターと宇宙艦隊が日 本帝國の指揮下にあつた事もあり、日本帝國の計劃指 導に基づいて推進されてゐたが、植民する人員や豫算 の面で歐洲聯邦やアメリカ帝國もそれなりの負擔をし てゐた爲、兩國では狀況に對する不満が生じてゐた。 一方で日本帝國は火星と月に於る他國の影響力擴大を 厭ひ、地球外生存圏に於る日本帝國の卓越を確立する 爲に此れらを日本の衛星國家として獨立させる事とし た。火星は日本帝國との人的同君聯合國として日本帝 國天皇が火星帝國天皇を兼ねる事とされ、月は世襲親 王家の一つを推戴する君主國「親王國」とされた。此 れらの一聯の動向は火星・月の多數派住民である日系 移民らには歓迎されたが、當然歐洲聯邦やアメリカ帝 國の強い反撥を招き、後の日華戦争敗戦と日本帝國解 體の遠因と成った。
西暦2xxx年	火星帝國による 木星四大衛星開 拓はじまる	火星帝國は人類生存圏の更なる擴大及び水・金屬等の 資源開發を目的として木星の四大衛星に基地を建設し、 植民を開始した。
西暦2xxx年	日華戦争はじま る	日本帝國と其の同盟諸國による深宇宙權益の獨占を終 らせる爲、中華帝國と其の他の深宇宙權益を持たない 諸國が宣戦。
西暦2xxx年	日本帝國解體	日本帝國は敗戦し、月親王國と共に中華帝國の支配下 に入った。天皇は廢され日本帝國は滅亡した。火星に 居住してゐた皇族の一人が天皇位の繼承を宣言し、火 星帝國は獨立した。また敗戦のどさくさに紛れ日本帝 國の運用してゐた軌道エレベーターが破壊された。破 片は地上に降り注ぐとともに、軌道上にも長く留まり、 地球人類は宇宙空間への安價な移動手段を失った。

年	出来事	概要
西暦2xxx年	兄洞部國・可兒愛國・伊尾國・雁戸國成立	火星帝國によって開發が進められた木星の四大衛星伊尾（イオ、いを）・兄洞部（エウロパ、えうろべ）・可兒愛（ガニメデ、かにめで）・雁戸（カリスト、かりすと）の植民地は、夫々に生活圏・經濟圏として成立する程度に其の規模を擴大した。火星帝國は木星圏に於る統治の円滑の爲、各衛星を伊尾國・兄洞部國・可兒愛國・雁戸國として獨立させた。獨立とは言ふものの、何れも火星帝國の指導下に諸資源を火星に輸出する衛星國の地位に留まった。
西暦2xxx年	火星帝國・兄洞部國・可兒愛國・伊尾國・雁戸國による木星圏條約機構設立	火星帝國軍の木星圏駐留と防衛、及び戦時に於る火星帝國軍と木星圏諸國軍の聯攜の爲、木星圏條約が締結された。
西暦2xxx年	タイタン戦争（泰坦防衛戦）はじまる	土星の衛星タイタン（火星名は泰坦）には火星帝國による基地が設置され、資源開發が始まつてゐた。一方地球では列強諸國が協力して軌道エレベーターを再建し、軌道上に投射出来る軍事力が恢復して來た爲、積極的な深宇宙權益擴大が唱へられる様になった。列強諸國は、開發が始まったばかりで未だ防衛體制が十分でないと思はれた土星圏に目を付け、此れを火星帝國から奪ふ爲、惑星の位置が適切になる機會を見計らった上で、大規模な艦隊を土星に派遣した。
西暦2xxx年	タイタン戦争（泰坦防衛戦）をはる	列強諸國の艦隊はタイタン上の火星帝國の基地を占據する事には成功したが、後を追って派遣された火星帝國の艦隊により大きく損耗、火星帝國側も大きな痛手を負ひ乍らもタイタン奪還には失敗した。しばし戦闘が續いたが補給もままならず泥沼化。列強諸國と火星帝國は和平條約の締結に合意した。土星圏を地球圏諸國の勢力圏とする代りに天王星圏・海王星圏は火星帝國の勢力圏とする事が定められた。

年	出来事	概要
西暦2xxx年	火星帝國による天王星圏の有人探查計劃始動	
西暦2xxx年	統合體（ガルデア）による統治開始	火星帝國は天王星圏への有人探查の際、其れ迄隱蔽されてゐたガルデアの觀測基地と星門を發見した。此れを受けガルデアは太陽系人類との直接的な交渉を開始する事とした。太陽系人類に對し、星門航行可能な宇宙船の所持の禁止と意識内容觀測・制御技術の研究の禁止とを要求。火星帝國は此れらを受諾し、友好的條約を締結すると同時にガルデアから太陽系人類の代表者に指名された。同様の要求は火星帝國を通し地球圏諸國に對しても成されたが、地球圏諸國は火星帝國による狂言を疑ひ拒絶。ガルデアは直ちに艦隊を派遣し、地球圏諸國の宇宙船・基地・其の他の宇宙開發關聯施設を破壊した。最終的に2496年2月29日、ガルデア・火星帝國・中華帝國を初めとする地球圏諸國との間で閏日條約が締結された。

共同研究者（共同創作者）を募集します

我々或羽大學麻田分校（あるばいがくあさだぶんかう）は共同研究者を募集してゐます。我々は天の川銀河とアンドロメダ銀河に互る兩河世界に就いて網羅的に研究してゐます。meta的には、我々は兩河世界をyuraru・火星帝國・ガルデアを中心に創作してゐ、共同創作者を募集してゐます。兩河世界の概略は「兩河世界の基礎知識とその研究への誘ひ」を御読み下さい（文末のQRコードを参照）。

以下總てmeta的な觀點で記述します。

我々は兩河世界を現實世界に近似せしめようと、歴史・文化・物語に限られず、言語・科學技術論・各種藝術・惑星史・生物史・醫學等網羅的に創作を行つてゐます。その爲に地球人類の其れ等に就いても研究と創作を行つてゐます。創作の成果は「兩河世界の基礎知識とその研究への誘ひ」が有るWikiに掲載してあります。活動は日々の研究と創作に加え、紀要の發行、帝國火星曆七曜表の發行等を行つてゐます。

凡ゆる才能が必要です。参加を御希望の方はWiki内に記載してある聯絡先からmemberへ御聯絡下さい。



<https://j.mp/32wfX8o>

或羽大學麻田分校紀要一四二六年春

一四二六年一月一日

發行者 或羽大學麻田分校

<https://scrapbox.io/yuraru/>

